# ■独逸日記

大学院総合理工学府・環境エネルギー工学専攻・教授
プログラムコーディネータ
谷本　潤

## 研究所、大学、アカデミック（『独逸日乗』より）

この稿は『独逸日乗』として大略週一のペースで恩師同僚仲間学生に配信している紀行記の一部である。筆者は6月末からJSPSとドイツ側カウンターパートのDAADのファンディングで3ヶ月間、ドイツ北部の小邑Plönにあるマックス・プランク研究所（進化生物学研究所）で在外研究している。ホストは数理生物学者Arne Traulsen教授。

Arne Traulsen教授は1975年生まれで、わたしと十（とう）違う。聡明な紳士であり、丁寧で親切だ。こちらにきて暇があり余っているものだから、モデルいじりをしている。彼と議論の最中、今イチの計算結果は初期一様分布がマズくって、2項分布逆比例でないと駄目なのかと思いついた。ふつう周囲にこう云った――微細に立ち入る――思いつきを説明するのはまま大変骨折りなのだが、ほんの刹那の説明で諒解する。相手は世界的理論家であるから数学的直感は当方足下にも及ばない。それにしても、頭脳明晰な人とのハナシは早い。

彼我の仕組みの違いは、日本と西欧圏との差異によるところも大きかろうが、大学と研究所との違いもある。マックス・プランク研究所は日本で云えば学振のような組織（Max-Planck-Gesellschaft zur Förderung der Wissenschaften；略してMPG）が運営する、事実上連邦立の研究組織で本部はミュンヘンにある。先端基礎科学を対象に大小様々な分野の研究所が国内に70以上ある。ここ進化生物学研究所には科学者、学生、スタッフ総計で80名くらいだが、テニュアー科学者（みなProfessorのタイトルがつく）はたった5人しかいない。あとはみな若いポスドクである。各地の研究所が、丸めて云うと九大の各部局のようなもので、丁度ここが規模からして総理工のような感じか。専任教授5人――うち一人は病欠中、もう一人は定年間近でローテを外さざる得ない中で所長の輪番が回ってくるのは、彼のような根っからの科学者にはつらいことなのだろう。そうは言っても、エフォート60%くらいしか管理業務はないと聴けば、どってことなかろうと思う。いや、羨ましい。現在、4つのグループがあり、Traulsen教授は理論生物学グループのヘッド――専任教授はグループに一人しかいない。グループが日本の研究所で云えば部門、大学院で云えば専攻といったところだろう。配下に学生数名を入れて20名くらいのアカデミックスタッフがいる。出身国は、無論、ドイツが多いけれど、スペイン、オランダ、UK、クロアチアなど欧州各地、ニュージーランド、インド、イランと様々。研究所なので学位の発給権はない。よって、学生は近くのLübeck大学かKiel大学かに籍がある。しかし、彼らのsupervisorはTraulsen教授だから、実質、ここの専任教授は両大学の併任と考えるべきなのだろう。進学予定の優秀者は修士でも入所が許される。このグループにもLübeck大学修士2年の女子学生が一人いる。

学生もいるが皆一応プロの科学者で、西欧圏の社会であることもあって、Traulsen教授と若い衆たちとの関係は、互いに名前で呼び合う、10時と3時のお茶の時間にはバカ話に花を咲かせる、フランクな雰囲気である。だが、垂直関係は当然あって、ここいらは日本も同様だが、ポスドク奉公はやはり大変だ。Arneも所長業務でかったるいだの何だの言っても、ウィーン、ハーバードと渡り歩いて37歳のときにここのテニュアーになれたことが一番大きかったと言っている。故郷はこのあたりの在らしく、二重の意味でここは彼にとって最適のポストだったのだろう。ドイツでは平均42歳でテニュアーになれる者はなる――もちろんポスト数は少なく競争は激しいからアカデミックのキャリアを途中で諦めていく者も多い。テニュアー獲得は、矮小化して日本の感覚で云えば国立大学の教授昇任と同じだろう。今いるポスドク連中をどっかのテニュアーに就かせることが最大の懸念事項だと言う彼は、俄然、教育者の顔になる。大学と違って分野再設定は短い時間スパンで行うことになる。グループには専任教授一人で、その選抜は向こう10年15年の方向および期待成果を決めてしまうから、ボンクラを選んだら一大事である。ミュンヘン中央の戦略策定とそれに基づく厳格な人事審査プロセスの責任は弥（いや）増しに大きい。人を決めると、その人の裁量に任せて、ポスドク枠を運用してスタッフを集めさせ、研究を推進していく。理研でもほぼ同様な機動的仕組みが取られているだろうが、教育でなく研究成果を上げる目的に照らすと、合理的な組織運営である。斯様の人事勘考ステムが若い科学者たちにあまりに強いプレッシャーとなって問題化したこと、また優秀な人材確保の観

点から、テニュアートラックが導入されている――そんな事ども も彼我に大差はない。と云うより日本がこっちのやり方をコピペ しただけのことだ。

じゃあ、なべて大差ないかといえば、そんなことはない。違う――圧倒的にちがう。何がどう違うって、研究、日常、生活すべてにおいて天地の如く違う。海外に出るたび思うけれど、西欧圏のファンダメンタルズそして社会的な富の蓄積の差に、ただ嗟嘆するしかない。ちょうど季節柄、皆が三々五々に2週間程度の夏休みを取っているから、人がまばらだ。それで十分に研究所として成立しているというのは、どういうことなんだろうかと思う。東京にいないだけまだマシだと思うが、どうでもいいことも、よくないことも、あれこれに振り回され常に寧日なき日本の生活を思い返す。

Traulsen教授のお宅で今居るスタッフを呼んでガーデンパーティがあった。十数人が集まったか。研究所から徒歩10分。家の前の庭は緩やかな斜面でTrammer湖に繋がっている。千坪じゃきかないだろう。5年前に買ったという。不動産屋の広告からして、何億もする邸宅ではない、普通の人でも十分購入できる家屋敷なのだろう。我が身の我が日本の卑小さが哀しくなる――が、深く考えないことにする。今いるこの時間を精々たのしもうと思う。

（Jul. 29. 2016）

Jorge Peña博士と。奥はArneの北の方。

Arne Traulsen教授です。いかにも鋭そうでしょう？

テント張ってBBQです。

お宅の庭先がこんな美しい湖だってのを信じられますか？